

# 「麗和」の由来をめぐって

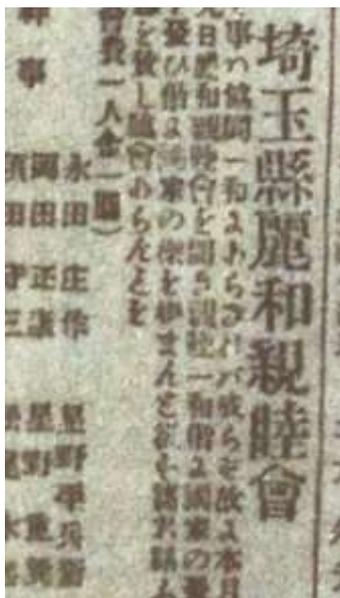
現在の浦高生や同窓生にとって、「麗和」という言葉は親しみ深いものです。創立90周年記念に開館した「麗和会館」、各界で活躍している先輩の話を聞く「麗和セミナー」、そして各地の同窓会の支部も「麗和」を冠するところが多くなっています。いずれも、浦中時代の『麗和会雑誌』の伝統に因むものでしょう。

「麗和」という言葉は「浦和」の美称のように理解されていますが、何時から、どんな形で広まってきたのか、具体的な様相は明確ではありません。いくつかの漢和辞典や国語辞典を引いても、「麗和」という熟語は見当たりません。

そこで、改めて関係史料を幅広く収集してみました。

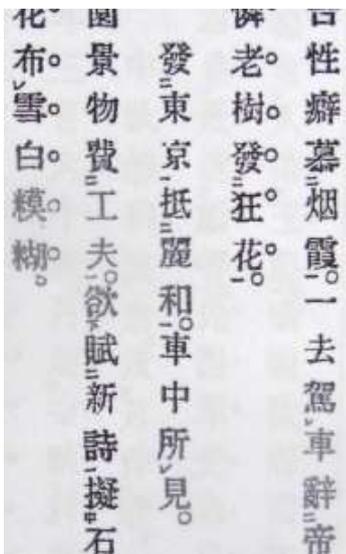
No.1 今回確認できた最古の用例、詩歌会誌の『麗和新誌』（明治12年・1879）

明治12年5月に浦和町で創刊された詩歌の同人雑誌、編集は浦和宿の麗和吟社。創刊号に序や跋はなく、「麗和」の意味に言及した文章もありません。投稿者は、埼玉県令の白根多助をはじめ県庁関係者が多く、彼らには説明なしでわかったのであろう。



No.2 『朝野新聞』の広告にみえる「埼玉縣麗和親睦會」（明治15年・1882）

「麗和」の名称は政治の世界でも使われている。明治13年8月に浦和で麗和交詢会という団体が結成され、明治15年3月17日の『朝野新聞』広告に「埼玉縣麗和親睦會」とみえる。この親睦会の幹事のひとり星野平兵衛は、のちに改進黨系の有力な県議となり、明治29年の第一尋常中学校（のちの浦和中学校）の開校式で浦和町長として祝辞を述べている。

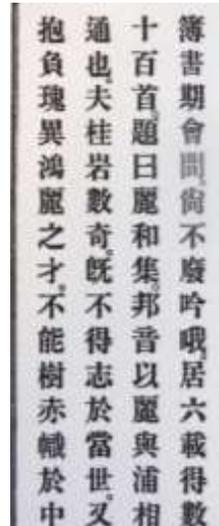


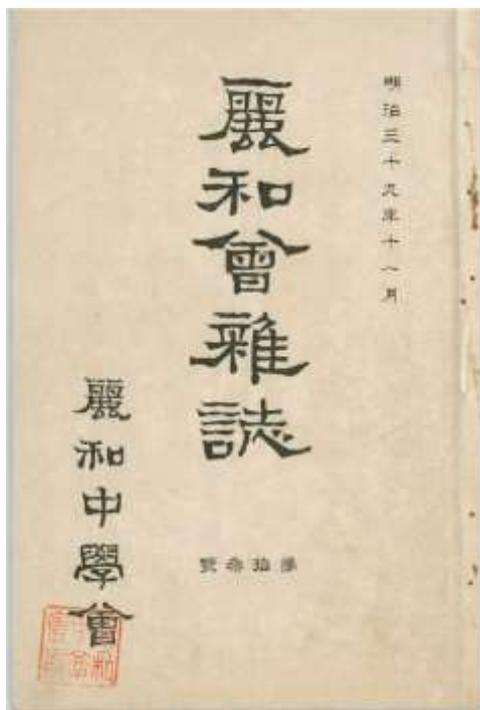
No.3 「麗和」の意味を説明し「浦和」の意味で使用した『桂巖詩鈔 麗和集』

（明治25年・1892）

明治25年に『桂巖詩鈔 麗和集』という詩集が刊行された。作者の溝口桂巖は埼玉県庁職員で浦和に住んでいた。その序文〇〇に「題曰麗和集。邦音以麗與浦相通也」と、「麗」と「浦」の邦音が通じるとしている。（左）

たしかに、長閑なさまを表す「うらら」に「麗」の字が宛てられるので、「麗和」を「浦和」と読むことができる。収録された詩にも「東京を発ち麗和に抵（いた）る車中」という表現も見える。（右）





No.4 浦和中学校の「麗和中学会」が刊行した『麗和会雑誌』  
(明治34年・1901)

明治29年に浦和町鹿島台に開校された埼玉県第一尋常中学校（明治32年に第一中学校、34年に浦和中学校と改称）には、麗和中学会が組織され、その機関誌『麗和会雑誌』が34年に創刊された。麗和中学会の会長は校長で、運動部・講話部・雑誌部の三つの部が置かれ、運動部はさらに野球部・庭球部・撃剣部など種目ごとに分かれていた。現在の部活動に近いようである。戦争中の昭和17年に浦和中学報国団となり、『麗和』と改称した51号を刊行したのが最後のようである。



No.5 浦和中学校の関係者も参加した俳句雑誌『麗和』(明治37年・1904)

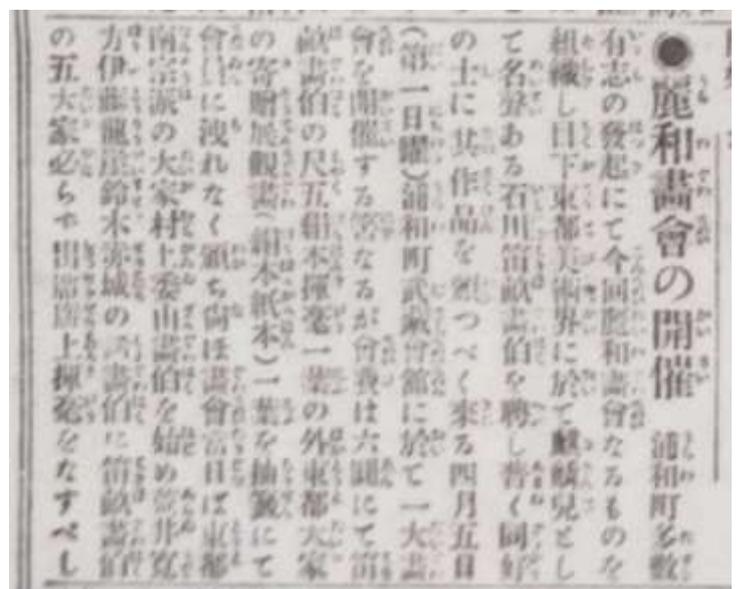
この雑誌は、俳句を楽しむ、県庁の日和会、裁判所の白雨会と紙燭会、中学校の常盤会の四つの会が合同し、麗和吟社を結成し創刊したものである。ここでも「麗和」の命名についての言及はない。

No.6 キリスト教会附属で創設された「麗和幼稚園」の認可書類(大正3年・1914)

大正3年には、当時の浦和町仲町に麗和幼稚園が設立認可された。これは明治44年に、諸聖徒教会ミス・アプタン宣教師が創設した、教会附属の「浦和幼稚園」を前身としている。当時の読みは確認できないが、「浦和幼稚園」を「麗和幼稚園」と表記を改めたようにみえる。

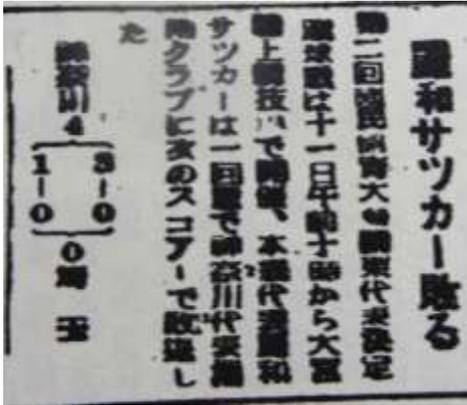
No.7 「うらわ」とルビを付した「麗和画会」の新聞記事(大正3年・1914)

当時の新聞は総ルビで、たまたま大正3年3月3日の『国民新聞』に「麗和画会の開催」という記事がある。見出しに「うらわぐわくわい」、本文に「れいわぐわくわい」とルビがふってあり、両方に読んだのであろう。



No.8 敗戦直後に文化都市浦和の建設をめざした「麗和会」の新聞記事（昭和21年・1946）

この会は、浦和に住む経済人など市民の有志30人ほどが発起し、市役所とも連携をとりながら進めたものようである。会名の由来や浦中との関係は明確でないが、翌年3月頃まで活動が確認できる。



No.9 浦和中学校サッカー部OBが組織した「麗和サッカー」の新聞記事（昭和22年・1947）

浦中サッカー部のOBは、昭和21年の県蹴球連盟の成立とともに「麗和クラブ」として登録し、国体の予選などにも出場した。また、男子陸上でも昭和20年代の後半に「麗和クラブ」の活躍が確認される。



No.10 職域麗和会としての「霞ヶ関麗和会」の新聞記事（昭和60年・1985）

昭和55年に同窓会館の建設計画が発議されると、それと前後して国家公務員の浦高卒業生が「霞ヶ関麗和会」をつくるなど、同窓会の活動も各方面で活発化した。



No.11 創立90周年事業として開館した「麗和会館」（昭和63年）  
この麗和会館の開館とともに、同窓会の会報も『麗和』と改められ、地域に、職域に麗和会の組織が作られていった。

このようにみえてくると、「麗和」という言葉は、明治10年代の初めから、埼玉県庁を中心とする文化社会のなかで、漢詩や和歌の同好会に、また政治的な集まりの会にも、「浦和」の美称として使用されていたようです。浦和中学でも、そうした地域の文化的な伝統を受け継ぎ、「麗和中学会」を組織し、『麗和会雑誌』を刊行していきました。

この麗和会の充実した活動は、戦争により中断されてしまいましたが、戦後、サッカーをはじめ運動クラブOB会などの名称として徐々に復活しました。そして、麗和会館の設立を契機に、「麗和」の名称は浦高関係者に一気に広まった感があります。この輝かしい伝統ある名称を、私たちの努力で、さらに内容豊かなものに育て上げていきたいと思えます。